

ハンノキを家具に

「大雪の大切プロジェクト」から生まれたこと

株式会社大雪木工 代表取締役 長谷川 将 慶
〃 常務取締役 長谷川 貴 充
〃 コーディネーター 中 谷 仁 美



■(株)大雪木工の始まり

(株)大雪木工は、箱物家具製造から始まりました。道産広葉樹の代表とも言うべきナラ、タモ、カバの一般材—マグロに喩えるなら、高級トロを外した残りの赤身部分—を使うことに着目し、突板貼りの自社ラインを導入するなど、当初より機械化による生産性向上を図った家具作りを指向したことが特徴です。林産試験場や合板工場に勤めていたことのある創業者の、当時としては個性的ともいえる発想によるものです。

■ハンノキに着目

当社では、北海道産ナラを用いたluonto（ルオント）シリーズで、テーブル、スツール、キャビネット等を提供しています。また、北海道産タモを用いた家具も製造していますし、根強い人気があるメープル、ウォールナットといった北米材も利用しています。

このような家具材として定番とも言える道産・海外産の樹種を使うと同時に、箱物家具の扉部分等にカバの代替材としてアルダーやハンノキを少量ではありますが使うことがありました。やがて、アルダーに人気が出て広く使われるようになり、その一方、ハンノキは依然として使用が進まないままでした。どちらも同属（カバノキ科ハンノキ属）でありながら価格に大きな差がつき、ハンノキであれば比較的安価に入手することに注目するようになります。

家具の原料材は、製造規模が大きい場合には、量が確保できるナラ（ホホワイトオーク）が中心とならざるを得ませんが、当社の規模であれば、入手量にある程度制約がある道産材でも十分に使いこなせます。また、一昔前であれば“欠点”とされた材表面の特徴が、“個性”と捉えるマーケットも育ってきているとともに、近年では産地に拘って買い求める層も増えている感触があります。当社で使用している木材は、国産材が3年前に5割を超え、現在は6割に達しています。

このような背景の下、自分たちの未来を考える「大雪の大切プロジェクト」（後述）の中で、これからの当社におけるモノづくりのひとつの方向を「北海道の森」を中心とした「持続可能性」としました。この考えに沿って選択した木材がハンノキです。

■原料の収集

ハンノキは上川管内の製材工場において、チップ向けの原木の中から選別して集めていただいています。製材仕様を伝えて製材・人工乾燥してもらっているほかに、大径原木については突き板にしてもらうこともあります。自社に突板貼りのラインがあるので、単板でストックしておけば自由に加工できるからです。

ハンノキ乾燥製材の現在の使用量は20~30m³/年程度で、必要量の確保は製材工場の協力もあって比較的順調です。また、製材品質もまあまあで、歩留まりはナラのセカンドグレード材と同等程度というところからです。

なお、ハンノキを受け入れる上で注意していることに変色があります。原木の状態でも長く放置したり、製材後に未乾燥のままにしたりすると、やや濃い橙色に変色してしまいます。ハンノキを家具材として使用するには、このような変色を生じさせない丁寧な扱いが求められます。

■ハンノキ家具

ハンノキの大きな特徴は、その軽さにあります。ナラやカバに比べてとても軽いため、製品の持ち運びが容易になる一方で、材表面が傷つきやすくなるのが課題となります。そのため、工場での製造時にはナラなどよりも取り扱いに注意しなければなりませんし、製品の検品も念入りに行っています。また、汎用の家具用樹種よりも強度が若干小さいので、製品の強度を確

保するためには工夫が必要になります。仕口の形状、材料の断面形状や厚さ等を検討し、荷重試験で強度を確認してきました。

ハンノキを使いこなすためのノウハウを積み重ねてきて、現在までに、椅子、テーブル、机、ワゴン、キャビネット、仏壇、二段ステップの7種類を商品化し、製造・販売しています。

これらのハンノキ家具製品は、手ざわりが良い、軽い、という点で良好な評価をいただいています。特に、軽さへの評価が高く、例えばナラ製品と持ち比べていただくとその違いがはっきりわかります。なお、お客様には硬い広葉樹家具に比べると傷つきやすいことをご理解いただいています。

軽い、ということは考えていた以上のメリットであることが実感されています。軽さを生かした積み重ね可能なツールといった製品開発につながっただけではなく、当初フラッシュコアで設計した部材にハンノキ板材を使い、ムク材家具としてアピールしている製品も生まれました。



ハンノキ家具 (ASAHIKAWA DESIGN WEEK)



ハンノキ家具 (本社ショールーム)

■大雪の大切プロジェクト

現在、大雪木工では自分たちがこれから進む方向を考える社内プロジェクト「大雪の大切プロジェクト」を、家具デザイナーの小泉誠さんを中心に進めています。プロジェクトのメンバーは、小泉さんのほかにグラフィックデザイナーの村田一樹さん、コーディネーターの平塚智恵美さん、そして当社のスタッフ全員です。

プロジェクトの基本的な考え方は、多少の遊び心を込めて次のことばにまとめています。各フレーズの始まりの一言をつなげてみてください。

大雪木工らしさが大切
意気込みや心意気が大切
生活を考えた家具が大切
伝えたい気持ちが大切
呑み会での無礼講も大切
大切にしたい思いが大切
一緒にワクワクすることが大切
急がず焦らずじっくりが大切
つくり続けることが大切

ハンノキ家具は、このプロジェクトから生まれたものです。ハンノキの柔らかい材質が小泉さんのデザインにうまくマッチしていると自負しています。

■トドマツの箱

「大雪の大切プロジェクト」から生まれたものには、ハンノキ家具と、もうひとつ「トドマツの箱」があります。ハンノキ家具から離れますが、これについても紹介いたします。

昨年のASAHIKAWA DESIGN WEEK (以下、ADW)の工場見学で、ショールームの中にトドマツ製の仮設受付コーナーを設置したところ、そのスタイルがたいへん好評で、製品化のお問い合わせを何件もいただきました。もともと当社は箱物家具が得意なので、それでは、ということで、今年ADWでは、「入れる「はこ」から、入る「箱」へ」をテーマに、いくつかの「入る箱」を試作し、展示しました。

厚さ30mmのトドマツ3層パネル(緑川木材㈱製)を用い、トドマツの白さがそのまま残るようにオイルで仕上げました。製品化はこれからですが、デザインウィーク期間中に訪れていただいた方々からは、おもしろい、という評価をいただきました。オフィス木質化の需要は一定程度見込まれていますし、家具であれば建築基準法の制限を受けないので、取り入れられや

すいところがあるだろうと期待しています。



入る「箱」 (ASAHIKAWA DESIGN WEEK)



オフィスユースをイメージした開放的な作業空間

■これから

当社は、日本家具産業振興会が進める「国産家具表示認定」の基準をクリアし、国産家具表示事業者の認定を受けています。国産家具表示の認定基準は、合法木材であること、ホルムアルデヒド放散量F☆☆☆☆製品であることなどとともに、製品強度を試験で確認すること、となっています。学童机・学童椅子を開発した際に、はじめて旭川市の工芸センターで強度試験を行い、家具認定マークを表示しました。今回のハンノキ家具の開発においても、接合方法や部材断面形状を工夫して強度を担保した上で、工芸センターで試験し、強度を確認しています。

現在、当社製品は、自社ブランド家具、OEM（共同開発）、コントラクトがそれぞれ1/3となっています。

原材料のストック、納期などの課題はありますが、自社で乾燥工場、化粧貼り工場を持っている優位性を生かした製品開発・製造を進めていきたいと考えています。



国産家具認定マーク

(本稿は2019あさひかわデザインウィークの展示会場で伺った内容に補足いただいたものです。ご協力いただいた、両長谷川氏および中谷氏に深く感謝いたします。編集部)